

分化の文化・未分化の文化

飯 田 満 良

0. はじめに

本稿は言語を文化的視角から考察しようとするものである。これは複雑であるが興味ある話題である。まずはじめに、西洋文化と日本文化の根底にある基本的な考え方について触れる。次に、言語がどのように物の考え方を反映しているか論じる。最後に、わかるということはどういうことか述べる。

1. 言語と物の考え方

1.1. 文化的背景

ここでは議論に関係あると思われる文化の諸相に限ることとする。

日本は島国であり、外国から侵略されることはほとんどなかった。運がよかったかもしれないが、そのために自他を区別する自我意識を持たないことになってしまった。日本では人種の同質性が前提されているので、自分の考えを他人にわからせようとしなくてもわかってくれると考えられている。我々は明言されることよりも含意されることの方を重んじる傾向がある。これは次のように考えると説明がつく。 $p \rightarrow q$ において (p は明言されること、 q は含意されること)、 p から q が唯一的に含意されることは日本人に共通の文化によって保証される。ここで注意すべきことは、この唯一性は日本文化を共有する内部者 (insider) にしか保証されないということである。すなわち、外部者 (outsider) には p は q 以外の含意を持つことになるであろう。この意味で日本語は外部者には閉じられていると言える。この結果、意志疎通の手段として、ことばによらない、言い換えれば、文化的前提に依存して言語に依存する

ことが少ない。さらに、同質的要素から異質性を求めるという特殊化の傾向がある。たとえば、形が似ているバラの一つ一つに何か唯一無二なものを見てとる。

他方、西洋の国々は異民族に囲まれ、たえず攻撃の危険にさらされていた。したがって、西洋人は強い自我意識を持つようになった。「人それぞれに考えが違う」というのが基本的考え方であるので、自分の考えを他人にわからせようとしなければわかってもらえないということが当然とされている。そのために、含意されることより明言されることの方を重く見る。これも次のように考えると説明される。p→qにおいて（pは明言されること、qは含意されること）、qの唯一性は文化によって保証されない。なぜなら、「人それぞれに考えが違う」ということが前提されているからである。日本の場合とは異なり、pはq以外の含意を持つことになるだろう。こういうことから、西洋では意志疎通の手段として言語が重じられる。また、異質要素から同質性を求めるという一般化の傾向が見られる。たとえば、科学者は表面的現象の背後にある一般性を求める。

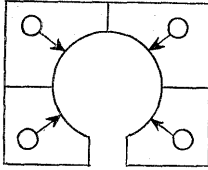
第一の前提に密接に関連する基本的考え方がある。中村は「日本の一般の人々は実際に見たり触れたりできる具体的なものしか受け入れない」と述べている。¹⁾ この現象主義的傾向から日本では抽象化作用そのものよりも生の現実から抽象化された結果が重視されるということが説明されよう。²⁾ 具体的には、機械信仰・理論信仰・制度の物神化などがあげられる。すなわち、西洋文化の根底にあると考えられる創造の源泉としての科学精神は受け入れられず、科学精神の産物であるいわゆる科学だけが受け入れられる。

これまでの議論は幾分抽象的であったので具体的に説明することにする。西洋文化と日本文化の自我意識における根本的相違は家の作り方に見られる。³⁾ 英国式の家では個室は家族の一人一人に与えられる。居間あるいは食堂としてとっておかれる共通の部屋よりも個室の方が重視される。個室は厚い壁で仕切られている。これからもプライバシーに対する強い意識がうかがわれる。家族

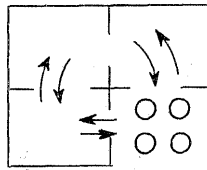
内でも、一人一人の独立性が当然のこととされている。日本の家では、部屋は家族全体の必要によって割り当てられる。自分の部屋を持つことはほとんど考えられない。また、部屋は障子で仕切られているにすぎない。しかし、障子はずすことによって、広くも狭くも使える。このような状況でプライバシーに対する意識が生まれて来ないのは当然のことであろう。自我意識が弱いから、広場とか公園のような意志疎通の共通の場の必要性も感じられない。

1. 家の構造

英国



日本



この例は西洋文化と日本文化の根底にある基本的考え方をつかんでいるように思われる。狭い土地しか手にすることができなかった日本人は内なる世界を求めようになった。我々は周囲の世界を快適なものに変えることはしないで、むしろ、我々の見方を変えて柔軟に外界に対する。他方、広い土地はあるが自然資源に恵まれない西洋の人々は外界に目を向けた。日本人とは異なり、西洋人は自然を人間にとって快適なものにしようとする。その中から、強い自我意識が生まれてくる。

1.2. 物の考え方

ここでは物の考え方の問題に触れたい。西洋人と日本人の物の考え方における基本的な相違の一つは西洋人が分析的に考えるのに対して、日本人は分析的には考えないということである。この点を明らかにするために Richards を引用する。⁴⁾

If a westerner has a problem, or wishes to discuss a complex subject, he tries to analyse it. He tries to break the problem or the subject down into separate parts. He then arranges these

parts in order of importance — from A to Z, say — and presents them in order.

—
If a person expresses an analytical point of view — that part A is more important than part B. — he is putting forward a personal point of view before he even starts to discuss a subject. He is saying, ‘This is what *I* think is important about this subject.’

非分析的考え方では、話者は非個人的 (impersonal) に話題を論ずる。すなわち、話者は「これを論ずると興味深いかもしれないし、そうでないかもしれない。私にはわからない。」というような言い方をする。

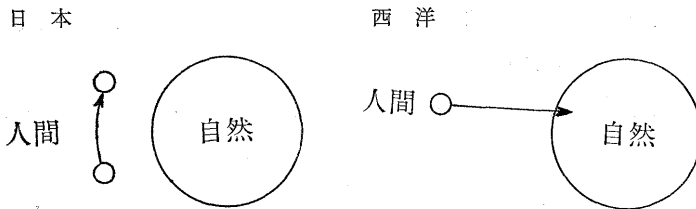
西洋的な物の考え方はすぐ議論または衝突を引き起こす。AがBより重要であるという話者の理由を問うことができる。議論に参加している他の人々が話者と意見が一致しないかもしれない。他の人々はBがAより重要と考えるかもしれない。他方、日本人の物の考え方に従えば、議論する人は衝突を避けることができる。衝突が起きそうになると、話者はすぐ話題を変えて、問題のさしざわりのない部分について話すことができる。話者は問題のまわりを歩きまわり、決定する前にあらゆる角度から問題を眺めたいと思っている。

換言すれば、西洋人は問題を個人的に論ずる。彼らは自分が問題についてどう考えるかをはっきり表明する (話者中心の考え方)。そして、自分の言うことに対して責任を取る。他方、日本人は問題を非個人的に論ずる。すなわち、個人的意見は隠そうとする。問題についてどう思うかをそれとなく言い、聞き手に推量させる (聞き手中心の考え方)。こうすることによって、責任を回避することができる。

論点を図を使って説明する。

2.

小さい円は人間を、大きい円は自然あるいは問題を表わす。日本人は自然のま



わりを巡る。自然の中の一部であると感じて、自然を見て楽しむ。西洋人は人間と峻別された自然と対決し、真理に到達しようとする。自然の働きを知るために自然を部分に分ける⁵⁾。

分析的な考え方に密接に関係していると思われるのは西洋人の動物的あるいは行動的な (do-oriented) 世界観であろう。西洋では活動的な確固たる目的を持った人が重んじられるようである。それと対照的に、日本人は植物的あるいは静観的 (wait-oriented) 世界観に立っているように思われる。我々は機が熟するまで待ち、自然と対決するようなことはしない。我々は自然の中で自然とともに生きる。

1.3. ことばと文化

ここでは言語が文化をいかに反映しているか具体的に見ていきたい。

非分析的な考え方がどのように日本語に反映されているか見ていく。最も明白な例としては日本語の「はい」—「いいえ」という答え方がある。この体系では自分の意見を表明するよりはむしろ他人の言うことに受け答えするために話者は「はい」とか「いいえ」とか言う。これは英語の yes-no という答え方と著しい対比をなす。英語の体系では話者は肯定か否定のどちらかで答えなければならない。すなわち、自分の意見を述べるのが期待されている。これは日本人の学生が英語をむずかしいと思う理由の一つかもしれない。

自分の個人的な考えを言わないですませることができるもう一つの方法が日本語にある。それは否定疑問文である。なるほど否定疑問文は英語にもあるが、日本人の方がよく用いるようである。否定疑問文は話者の考えを聞き手に

押しつけない。この構文によって、話者は聞き手が否定的な答えをする可能性が強いことを示唆している。したがって、聞き手の方では、疑問文の文字通りの意味でなく話者の期待しているものと考えられるものに添って、答えることができる。

(1) a. Won't you close the door?

b. Will you close the door?

ついでながら言うと、(1a) のような否定疑問文は話者の考えを聞き手に押しつけず、未決定のままにしているが、(1b) のような肯定疑問文は yes という答えが得られると暗に前提しているという点で、(1a) は (1b) よりも丁寧な言い方である⁶⁾。上の文を日本語と対比して考えてみよう⁷⁾。

(2) A. 今日は学校へ行きませんか。

B. はい、行きません。(相手の言うことに同意する受け答え)

いいえ、行きます。(相手の言うことに反対する受け答え)

(3) A. 今日は学校へ行くでしょうか。

B. はい、行きます。(同意する答え)

いいえ、行きません。(反対する答え)

日本語は他人の受け答えに合わせるようになっている。人に質問するときには、その答えを引き出しているのである。すなわち、相手の考えがどうであるかという観点から話をしている。相手がどう出るかによって自分の考えを変えることができる。このようにして相手との衝突を避けることができる。日本語は対人指向的言語であると言えよう。

非分析的考え方に関連している第三の特徴は受身構文である。

(4) a. 雨に降られた。

b. 妻に死なれた。

(4) はできごとが自然に生じたということを含意する。農耕に従事していた日本人は変わりやすい天候に非常に影響を受けてきたので、自然現象を避けられないものとして受け入れなければならなかった。さらに、日本人は、自然に自

己展開して一人間が手を加えて人工的ではなく一実を結ぶものを重んじるようになった。

(5) a. 話が決まった。

a'. We came to an agreement.! We decided on the plan.

b. 赤ちゃんが生まれた。

b'. We had a baby born. (personal)

A baby was born. (impersonal)

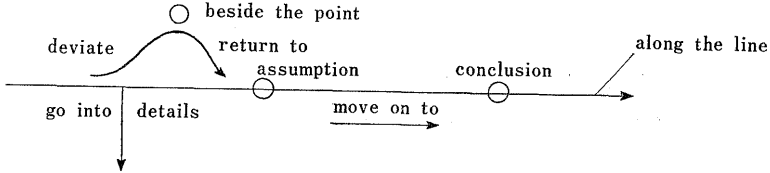
(5a) は自然に話が進んだということを含意するが、(5a') は当事者の方で努力がなされたという含意をもつように思われる。

これに関連して「できる」の語源について考えてみよう⁹⁾。これはもとは「無から有が生じる」を意味する「出で来る」という形で、のち「でくる」に変わり、現在の「できる」という形になる。ここでもまた、「できる」のような非常に基本的な単語に日本人の非個人的 (impersonal) な見方を見ることが出来る。これとは対照的に、西洋の個人的見方は *select, elect & elegant* (語源的意味：選び出す), *abstract* (引き出す), *interpret* (価値の中へ), *intellectual* (…の中から選び出す), *neglect* (集めない) のような単語に見られるように思われる。これらの単語は話者の方で積極的に「選ぶ」ことを意味する。これは、西洋人が選択の自由を重く見ていることを示しているように思われる。

非分析的考え方から生じる第四の特徴は点的思考であるが、分析的考え方からは線形思考が生ずる。すでに述べてきたことであるが、西洋人は人それぞれに考えが違うという基本的前提に立っているので、自分の考えを他人にわかしてもらうためにはできるだけ明確に自分の考えを表明しなければならない。他人に「暗黙の」線に従うことは期待できない。したがって、自分の考えを明確に表明できる線形思考は西洋人に合っている。他方、点的思考は日本人に向いている。なんととなれば、日本では人種の同質性が前提されているので、できるだけ暗に言う傾向がある。与えられた点(明言されたこと)と文化的前提に基づ

いて他人が暗黙の線を理解することが期待されている。上で述べたことを、線形思考に限って、図で説明する。小さい円は論点を、線は議論の流れを示す。

3.



(6) のような表現から西洋人は議論を線形的に見ていることは明らかであろう。

(6) a. along the *line* of his argument, the *thread* of an argument, a *chain* of reasoning

b. return to, move on to, go into details; by the way, a way of thinking, *deviation* 'turning away from the way.'

c. make a point, come to the point, get a person's point, a case in point, keep/stick to the point, beside the point, to the point, miss/see the point of a joke

2. 日英語比較

2.1. 抽象性

ここでは、日本語と英語を抽象性という観点から比較する。§1.1. で述べてきたように、西洋文化では人はそれぞれに考えが違うということが前提とされている。そこで西洋人は自分の考えを人にわからせる共通の基盤を探そうとする。この前提の必然的結果として、自分の観点から必要なだけ特定の (specific) に述べられる共通のあるいは抽象的言語を使うことになる。英語はそのような特定の言語の一つであり、日本語もその一つであるように思われる。しかしながら、その類似性は表面的である。二つの言語は質的に異なる。

簡単に言えば、英語は日本語よりずつと抽象的であり、必要に応じて、特定化できる。他方、日本語は抽象化の過程を経てきてない、具体的感性的言語である。この相違については§3.2.で詳しく論ずる。

第一に、二つの言語は数量表現が異なる。日本語では、どの分類詞 (classifier) を選ぶかは物によって異なる。それに対して、英語の表現は物とかかわりなく、すべて名詞の前に冠詞がある⁹⁾。

- (7) a book : 一冊の本
 a car : 一台の車
 a flower : 一輪の花

「一冊」は「本」と意味上密接に関連している。これは日本語の方が具体的に物に依存しているという我々の主張を支持する。これに関連して冠詞の用法について論ずるのが適切であろう¹⁰⁾。

- (8) a. Men speak language but animals don't.
 b. Men speak (different) languages.
 b'. He doesn't know a language.
 c. He doesn't understand the language.

(8a) では世界じゅうの言語すべてに共通な本質的屬性である言語という概念が抽象されている。(8a) では言語は同質的な未分化な全体としてとらえられている。(8b') では言語全体の一部としてとらえられている。言語が同質的なものとしてとらえられているので、言語全体を部分に分けることができるのである。(8b) では諸言語を集めたものとしてとらえられている。(8c) では言語は唯一的に特定化されている。

第二に、英語には冠詞があるので論理関係を述べるのが容易にできる。これは英語が日本語より抽象的論理的であるという主張に支持を与えることになる。

- (9) a. Taro is a Japanere.
 b. Freud is *the* originator of psychoanalysis.

- (10) a. 太郎は日本人である。
 b. フロイドは精神分析学の創始者である。
- (11) 論理関係
 a. 太郎 \in 日本人
 b. フロイド $=$ 創始者

(9a)と(9b)は(10a)と(10b)より明確に論理関係を表わしている。

第三の相違は動詞に関する。

- (12) a. put on (a dress, a hat, shoes, glasses ; a mustache, etc.)
 b. (服を)着る, (帽子を)かぶる, (靴を)はく, (眼鏡を)かける;
 (ひげを)はやす

動詞句 put on の目的語は身につけるものと言えれば十分である。そのような一般化は対応する日本語の表現では成り立たない。日本語では目的語が変わると動詞も変る。換言すれば、それぞれの動詞が、身につける場所に関して指定されている。

第四に、日本語は擬声的表現が豊富にある。

- (13) a. スーツと出る (loom)
 b. キャットと叫ぶ (scream)
 c. ツルリとすべる (slip)
- (14) a. $\left. \begin{array}{l} \text{ゲソゲソ} \\ \text{ゲッソリ} \\ \text{ゲソット} \end{array} \right\}$ やせた。cf. He lost twenty pounds.

擬声的表現は物事を概念化せずに感覚的にとらえる日本人の見方を反映している¹¹⁾。(14)では三つの類似した表現に意味の微妙な差異が見られる。これらの例から日本語は英語より具体的であることがわかる。

第五に、「ども」、「たち」、「ら」を伴って形成される日本語の複数表現は感情的色彩を帯びているが、英語の表現ではそういうことはない。

- (15) a. 今の大臣どもは(軽べつ的)

私／手前ども（謙譲）

b. あいつら（軽べつ的）

c. 鳥たち（親愛）

たとえば、(15b)では、「ら」は話者の気に入らない人に対する感情を表わす¹²⁾。

第六の例は日本語はより具体的であるという主張に間接的な根拠を与える。

(16) a. Whatever is phenomenal is impermanent; their essential quality is appearance and disappearance; When these (appearance and disappearance) repose, tranquility is comfort.

b. Although fragrant in hue, (blossoms) are scattered. For everyone, life is impermanent. This morning I crossed the outermost limit, and I am not intoxicated.

仏教がインドから日本に伝えられたとき、もとの抽象的表現(16a)は色彩豊かな絵画的なイメージを素材として使って、それらのイメージの背後にある抽象的な考え方を暗にほのめかすにとどめている、感情的表現に変えられた。(16b)は日本人の物の見方が感覚的・具体的であることを示唆している¹³⁾。したがって、日本語は視覚的具体的であるという主張に間接的な支持が与えられることになる。

第七に、日本人は肯定表現よりも否定表現を好むように思われるが、アメリカ人は逆である。

(17)¹⁴⁾ a. He will be back before four.

b. Hunger is the best sauce.

c. All I can do is this.

d. He can only guess.

(18) a. 彼は四時頃にならなければ帰りません。

b. すきっ腹にまずいものなし。

c. これしかできません。／これだけできます。

d. 彼は推量することしかできない。

d'. ?彼は推量することだけできます。

英語の表現は肯定形であるが、それに対応する日本語の表現は否定形である。一般に、肯定形は否定形より特定のである。すなわち、肯定形は明言的 (assertive) であるのに対して、否定形は含意的 (implicative) である。すでに述べてきたことであるが、我々は明言的に述べられることよりも含意されることを重くみる。したがって、日本人は否定形を好むのである。(17d)を(18d')にも訳せるかもしれないが、(18d')は不自然に思われる。(17)と(18)から英語は日本語より明言的で特定のであると言えよう。英語の特定性は日本語のとは質的に異なる。この相違については §3.2. で論ずる。

第八に、英語は特定性がずっと細かい¹⁵⁾。

(19) *A man and a woman happened to be passing; the man suddenly turned round and threatend me; he said I had no right.*

(20) *Joan has received a proposal of marriage; it took us completely by surprise.*

(21) a. *This basin leaks.* (general)

b. *This basin is leaking.* (specific)

(22) a. *The road can be blocked.* (theoretical) = 'It is possible for the road to be blocked.'

b. *The road may be blocked.* (factual) = 'It is possible that the road is blocked.'

(23) *possible*→*likely*→*probable*→*certain* (general→specific)

(24) *can, may, shall, will; could, might, should, would*

(19)では定冠詞の方が不定冠詞より特定のである。(20)では単純過去は現在完了より持続期間が限られている。(21)では現在進行形は単純現在より持続期間が限られている。(22)では差違がさらに細かい。(22b)は(22a)より特定のであ

る。(23)では左から右に行くに従って特定性が高くなる。(24)では前のグループは後のより確率が高い。

第九に、英語には文から抽象された名詞句があるが、日本語にはない。

(25) a. Her failure to pass the exam disappointed me.

b. She failed to pass the exam.

(26) a.? 彼女が試験に合格しなかったことが私をがっかりさせた。

b. 彼女が試験に合格しなかったのがっかりした。

(25a)の名詞句 *her failure to pass the exam* は (25b) を抽象化したものである。日本語にも *her failure to pass the exam* に対応する抽象的形式「彼女が試験に合格しなかったこと」があると言うこともできるが、(26a)は(26b)より不自然に思われる。したがって、英語には簡潔に、抽象的に命題を表わす方法があると言える。

最後に、日本人が理解するのに困難を感じたり、日本文化に従って原義を変えようとする傾向のある語をあげる。これらの語は西洋文化を背景にしてはじめて正しく理解されるものであるが、抽象的論理関係を表わす。

(27) a. alternative, identify, identity, commit, critical, etc.

b. egoism, individualism, etc. (悪いニュアンス)

humanism, etc. (いいニュアンス)

frame of reference, orientation, etc.

特に、(27a)は(27b)、つまり自我意識を前提とする。要するに、英語は論理的に結合した言語で特定の状況に依存することが少ない。

2.2. 言語の役割

たくさんの人々、が小さな国に住んでいるので、当然のことながら、日本人は自然界より限られた社会関係を重くみた。我々は変化しやすい人間の社会に深くかかわっている。そこで融通性が人間関係に行き渡る。すでに複雑な人間関係にまきこまれているが故に、我々の表現は非常にあたりさわりのない。状況で我々の意図することが理解される。こういう環境で人間関係を円滑にする

ために敬語法が作り出された。日本では言語は人と人の関係を円滑にする役割を果たしたが、論理的思考の手段として用いられることはめったになかった。

他方、西洋人は比較的变化することのない自然界を考え方の基礎としているように思われる。彼らは自然の中に神の力が働いているのを知ることによって神（Logos）に近づけると信じている。人間関係に深くまきこまれることを恐れていないので、表現が非常に個人的である。したがって、言語は西洋では論理的思考の本質的手段として認識されてきた。そして、非言語的意志疎通より言語的意志疎通が重んじられる。

3. 分かるということ

3.1. 抽象化

複雑な世界を理解するということはどういうことであろうか。最初に話者は外界の中に繰り返される主題に気づき、それから自分の視点からそれらの主題を一般化する。定式化された一般化は自分の以前の経験に照らしあわせて成り立つかどうかためされる。このようにして物事がより広い脈絡の中でとらえられる。しかしながら、定式化された一般化は一つの抽象化、すなわち、一つの見方にすぎないということを忘れてはならない。そこで、真理により近づくために一般化を絶えず新しい視点から見るようにする。

3.2. 視点

ここでは二つの見方が比較される。一つは西洋文化に典型的な鳥瞰の見方であり、もう一つは日本文化に特有な虫驗の見方である¹⁶⁾。

鳥瞰の見方では、自らの視点に基づいて、観察者が広く全体を見渡すために距離をおいて対象を見る。すなわち、自分の準拠枠によって対象の本質的特性と付随的な特性をふるいわけする。この意味で、これは議論に基づく二値的（two-valued）見方である。すなわち、自らの視点から真偽を区別する。この見方には三つの主要な特徴が見られる。

第一に、観察者は自分の視点を意識している。換言すれば、観察者は対象と

はっきり分けられている。外部者として物を見ている。

第二に、観察者の視点はある一定の範囲に固定されている。そのために、既知を背景にして未知のことに注意を集中することができる。すなわち、観察者は対象を全体的にとらえることができる。同時に、視点が固定されているということは、換言すれば、観察者が一貫性を求め、同一の原則に従うことを意味する。したがって自分と視点が異なる他人と衝突することになる。

第三に、時とともに変わる現実を全体的視野からながめることによって、現実をこえることができる。すなわち、時とともに変わらない概念の世界を思い浮かべることができる。

他方、虫驗の見方では、観察者は対象に密接して感覚的に対象を感じとる。虫驗の見方に見られる三つの主要な特徴をあげる。

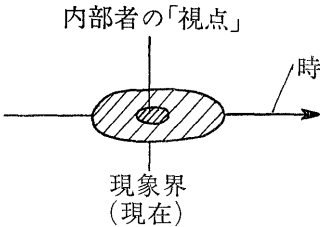
第一に、観察者は自分の視点を意識していない。観察者と対象とは区別されていない。内部者として物事を見る。また、「無構造」という日本の基本原則を犯さない限りはどのような文化をも受け入れる。この原則に基づいて原文化を日本化する。したがって、全体的視野の中で異文化をとらえることができない。ほとんどの文化も受け入れるという意味で多値の見方と言えるが、「無構造」あるいは「反科学精神」という基本原則は感情に基づく二値の見方に立っている。

第二に、観察者の視点が移動する。これはある一定の範囲に注意を集中できないということの意味する。さらに、観察者の概念の世界と現実はかなり重なるので、現実をより広い脈絡の中で見ることができない。視点の移動は同一の原則に従わないということの意味する。その結果、矛盾する行ないをすることになる。したがって、自分と意見を異にする他人との衝突は生じない。

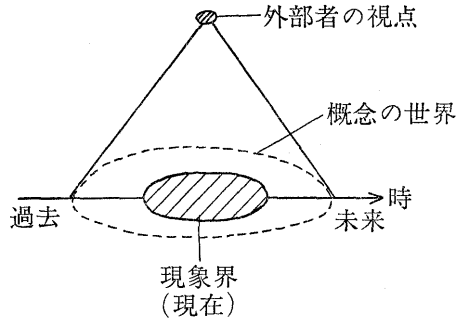
第三に、現実と観察者の概念の世界はかなり重なるので、時とともに変わる現実をこえることができない。すなわち、時とともに変わらない概念の世界を心に思い浮かべることができない。

論点を明らかにするために図を用いて説明する。

4. 虫驗的見方



鳥瞰的見方



さて、日本語と英語の特定性あるいは具体性における質的相違について論じてみたい。日本人は具体的感覺的表現を用いる。英国人も具体的特定の表現を用いる。しかしながら、その類似性は表面的なものである¹⁷⁾。日本人は視点を意識せずに表現する。見たり感じたことの概念を抽象しない。したがって、この概念によって自分の感情を特定化できない。もっと明確に言うなら、特定の鳥にだけしか当てはまらない概念を形成する。その概念は本質的特性とともに付随的特性も含んでいるので、もっと多くの鳥が考慮されるにつれて、修正されたり捨てられなければならない。

他方、英国人は自分の視点を意識して考えを述べる。彼らは最初に広範囲にわたって当てはまる一般的基本的概念を自らの視点から抽象する。それから、この一般的概念によって個別の対象を特定化する。すなわち、自らの準拠枠によってその対象を意味づけすることができる。たとえば、最初に種々の鳥から鳥一般の概念を形成し、それから、この一般的概念によって個別的な鳥を特定化する。

4. 結び

英語と日本語を中心にとどのように言語が物の考え方を反映しているかを見て

きた。これは全く手始めの分析で、言語と文化という大きな問題の核心にふれるにはさらに深い、木目の細かい研究がなされなければならない。しかしながら、強い自我意識が西洋文化の根底にあるのに対して、日本文化はそれを欠いているということは言えよう。換言すれば、西洋人は分析的あるいは個人的視点に立っているのに対して、日本人は非分析的あるいは非個人的視点に立っている。この考え方は言語ばかりでなく、生活の他の領域にも反映されている¹⁸⁾。たとえば、レストランで西洋人が注文するときは非常に注文が明確であるが、日本人はあまりはっきり言わないようにする。自分の好みによって注文するのは失礼であると考えられている。むしろ、はっきり言わないのが礼にかなっているとされている。

文化的視角から見た言語の考察は言語が社会とともに変わるので修正されなければならないであろう。たとえば、英語の原文から直訳された日本語を不自然に感じなくなっている¹⁹⁾。その程度だけ、我々の言語感覚は変化してきたと言えよう。しかしながら、西洋人の我々と類似した見方をこの傾向が意味するものとは考えてはならない。むしろ、見解の相違はしかたがないと互いに認め合うべきであろう。これに基づいてはじめて相互に理解することが可能である。

注

- 1) 中村 (1964, 575).
- 2) 丸山 (1961, 58).
- 3) 中根 (1972, 100).
- 4) Richards (1976, 31-37).
- 5) こうすることによって分けられた部分間の明示的關係を論ずることができる。その結果、論理的思考が可能になる。私の考えでは、論理的思考は分析を前提とする。これに関連して、語源的に「分ける」という意味の基本的単語をあげる。

certain, concern, crime, discern, discrete, discriminate, crisis,

criterion, critical; concise, decide, precise; anatomy, atom; dissect, insect, sect, section, sector, segment; apartment, compartment, depart, department, departue, impart, impartial, participate, particle, particular, partition, party; detail, retail, tailor, tally and so on.

これらを、分けることを前提にし、「いっしょにする」という基本的意味の単語と比較してみよう。

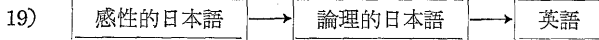
combine, compose, compound, comprehend, compute, connection, construct, organize, symbol, syntax, system and so on.

- 6) Lakoff (1974, 21-22).
- 7) Stanley (1975).
- 8) 大野他 (1974).
- 9) 英語にも a group of people, a glass of beer, a herd of cattle などの類似した表現があるが数が限られている。
- 10) Keene (1969, 20-22)
- 11) 宮内 (1975, 74-75).
- 12) 古谷 (1972, 183-185).
- 13) 中村 (1964, 555).
- 14) 金田一 (1975, 177).
- 15) (19)から(22)の例は Leech (1971) による。
- 16) 三浦 (1976, 14-26).
- 17) 宮内 (1975).
- 18) Hall (1966) が説明している、アメリカ人の時間の概念を考えてみよう。我々の議論に関連のある箇所を引用する。Not only do we Americans *segment* and *schedule* time, but we look ahead and are oriented almost entirely toward the future. (p. 16)

(イタリック体は筆者)

日本人の非分析的考え方は日本人の雑種のあるいは共存的性格に見られる。我々は相矛盾するものを受け入れても気にならない。相矛盾するものの共存を自

然なものとして受け入れる。換言すれば同一の原則に従うのに困難を感じる。たとえば、神と仏の共存を当然のこととと思っている。類似した例としては、箸とフォーク、たたみとカーペット、着物と洋服などがある。



References

- 古谷千里 (1972), 「A boy と「一人の」少年」『日英のことばと文化—宮内秀雄教授還暦記念論文集』 pp. 177-190. 東京:三省堂.
- Hall, E. T. (1966), *The silent language*. 東京:南雲堂.
- Keene, D. (1969), *Problems in English*. 東京:研究社.
- 金田一春彦 (1975), 『日本人の言語表現』(講談社現代新書). 東京:講談社.
- Lakoff, R. (1974), *Language and woman's place*. 東京:文理大学事業部.
- Leech, G. N. (1971), *Meaning and the English verb*. London: Longman.
- 丸山真男 (1961), 『日本の思想』(岩波新書). 東京:岩波書店.
- 三浦つとむ (1976), 『日本語はどういう言語か』(講談社学術文庫), 東京:講談社.
- 宮内秀雄 (1975) 「日本的思考と英語的思考—数量表現を中心に考える—」『学苑』422号, pp. 2-14. 昭和女子大学近代文化研究所.
- Nakamura, H. (1964), *Ways of thinking of Eastern peoples: India-China-Tibet-Japan*. (ed. P. P. Wiener). Honolulu: The University Press of Hawaii.
- 中根千枝 (1972), 『適応の条件—日本的連続の思考』(講談社現代新書). 東京:講談社.
- 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎 (編) (1974), 『岩波古語辞典』, 東京:岩波書店.
- Richards, B. (1976), "Ways of thinking," in *A bridge over the seas*, pp. 31-37. 東京:英潮社.
- Stanley, L. (1975), *The mutual reinforcement between Japanese Language and its culture*. 東京:開文社.